



海上沢

九〇四<sup>ノ</sup>ピーク上から降りる方向をたしかめる。西へ下って沢の源流をさがす。源流をみつける。この時一時四〇分。あたりはまるで湿地帯のようなぬかるみだ。沢ぞいに下る。本流らしき沢に出る。ここで昼食。

これより沢を登る。滝はまったくない。ヤブこぎに近い沢だという印象強し。ヤブに前をふさがれる所まで行く。それ以上は進みにくいので戻ることにする。

三〇分位下って八<sup>ノ</sup>のナメに会う。そして三<sup>ノ</sup>の滝。作業小屋らしいものがある。下降を予定した沢ではなく、元小屋川であることに気づく。

一三時三〇分林道へ出る。ここから大沢駅を経て峠駅までは長い道のりであった。(記・)

〔タイム〕

九〇四ピーク一・三〇―元小屋川出合一・四〇―  
最高到達点二・二五―作業小屋一三・三〇―峠一五・  
三〇

## 海上沢

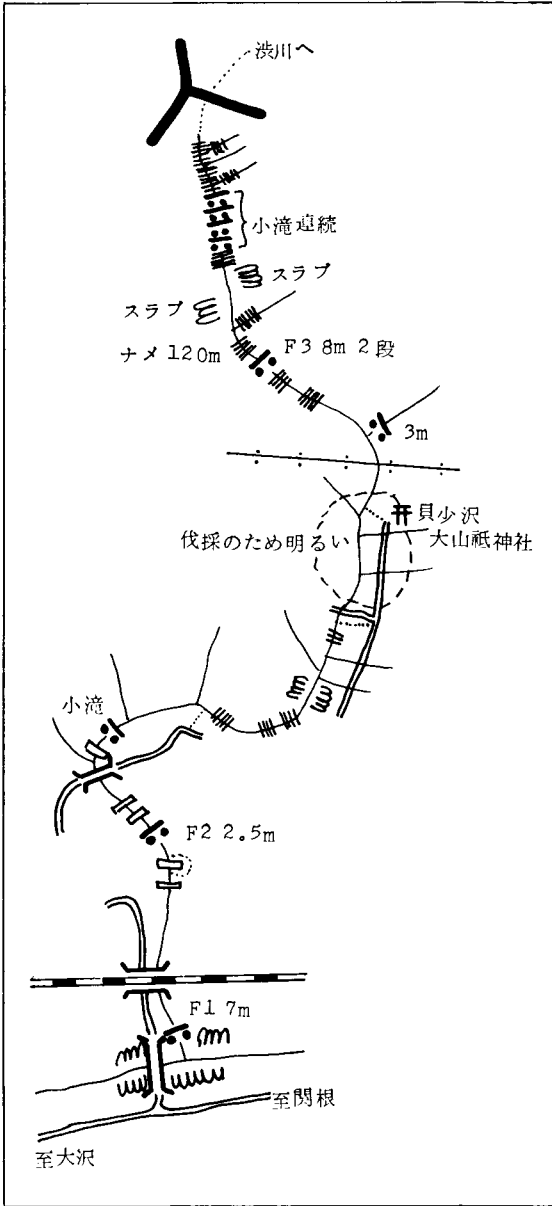
一九八〇年九月十四日

### ◆天気(晴)

大沢駅でお茶をごちそうになってから道路を海上沢まで歩く。三〇分程で羽黒川との出合に着く。出合にF1(七<sup>ノ</sup>)がそそぎ入っている。

最初は林道を歩く。林道が沢から離れる所から沢に入り、砂防ダムをひとつ越えてわらじをつける。すぐにF2(二・五<sup>ノ</sup>)。これをすぎると石で積んで作った小さな砂防ダムがある。

林道が沢を横切る。沢には変化なく、ヤブがかぶさっているの、沢を見ながら林道を歩く。ナメが見えてき



海上沢 (作図: 〇〇〇〇)

た所で再び沢に入る。少し進むと、兩岸が五段程度の岩場となっている。ゴルジュと言うには小さすぎるミニゴルジュがある。それを過ぎると林道が切れているところに出る。

小休止をして先に進む。途中から林道に出てそれを歩いていくと、伐採のため明るくひらけた場所に出、右に

神社があり、そこで林道は終わっている。

沢に入り、高圧線の下を通過すると、今までのヤブがなくなり、ナメが断続的に続き、歩きやすくなる。F3を越えると上部はきれいなナメだ。右から支流が入ると、左、右と二つのスラブがあり、よい目じるしとなる。その上部は小滝とナメが連続しており、快適な沢登りが楽し

める。下部のヤブがなければ、小さいが楽しい沢である。

一・二〇、沢は左右に分かれる。水量は右沢の方が多いが地図上から左沢に入る。少々遡って水がかれ、ヤブこぎになる。

一五分程で尾根に出る。宍戸君が木に登り、現在地点を確認し、渋川にむかってヤブをこぎながらの下降に移る。  
(記・和)

(タイム)

大沢七・四五―海上沢出合八・一五―尾根一・二五  
―渋川一・二〇

## 長根沢右俣

一九八〇年九月七日  
和

◆天気(曇のち雨)

峠駅から歩いて沢に入る。八時一五分遡行開始。水は割合と冷たい。左俣分岐に九時三〇分到着。比較的早いペースで来た。右俣と左俣は水量比がほぼ等しい。

入口に大岩が立ちふさがっている右俣にルートをとる。岩質は柔らかい泥岩といった感じである。三〇分程

歩くとかなり大規模な崩壊地があった。ここより一〇分

位歩くと待望の滝である。四トビ、三トビ、三トビと連続しているが、わけなく直登できた。更に二〇分程歩くと一〇トビ程のナメになった。

一〇時四五分、左岸からの支流が合流する所で昼食。天候のかげんで、長居をしていると体温を奪われて寒くなる。早々に出発。

F4トビ、F5ナメ状の滝(三トビ)を越える。一二時〇五分、沢が二分し右に進路をとる。一〇分程で水が涸れた。  
(記・和)

(タイム)

峠七・二〇―出合八・一五―左俣九・三〇―終了一・二一五

## 長根沢左俣

一九七八年七月二十三日  
和

◆天気(晴)

峠駅から出合まで線路沿いに歩く。碎石の角がうすい。地下足袋の底からまともにくいこんで、とても痛い。出